

1日の新規感染者が10万人に迫る新型コロナ第6波の真ただ中、さて今回はどうなるのかと考えながら4月の第51回日本脊椎脊髄病学会の横浜の宿を探している。いろいろな学会のたびに「今度こそはface to faceの議論ができるか」と毎回期待しながら、なかなか実現しない。新型コロナ騒動が始まって2年が過ぎようとしている。トンネルの出口はいつ見えるのであろうか？

さて、今回の特集のfailed back surgery syndrome (FBSS)も、脊椎脊髄外科医にとっては出口の見えないトンネルとなることがある。外科医にとって脊椎脊髄疾患の治療は、正確な診断と確実な手術手技に尽き、そのどちらが不十分でもこの泥沼に落ち込む可能性がある。前回本誌でFBSSが特集されたのは2009年、13年前であったが、そのときには再手術手技に焦点が当てられていた。

今回この編集後記を書くにあたり、「そういえば一時ほどfailed backという言葉が聞かなくなった。診断も手術も随分発達したから」と思って、PubMedで「failed back」と入れてみた。すると意外なことに、論文数は年々増加傾向にあるのである。そして、近年の論文では「spinal cord stimulation (SCS)」や「neuromodulation」に関するものがかなりの割合を占めていた。患者数の増減は不明だが、どちらにしてもFBSSが激減したわけではなく、ペインクリニックの先生たちにお世話になっているということなのだろう。そういった目で今回の特集を眺め直してみると、「下肢の絞扼性末梢神経障害」など比較的新しい疾患概念を含んだ診断、「FESS」や「LLIF」など最近の手術手技に加えて、近年発達してきた「薬物療法」や「SCS」などの手術以外の治療法が網羅されており、大変バランスの取れたアップデートな特集だということがあらためてわかった。

このように知らず知らずのうちに、われわれを取り巻く環境も変わっていく。新型コロナにおいても、現在主流のオミクロン株は感染力はきわめて強いが、デルタ株に比べ重症化しにくいともいわれ、新型コロナウイルスもそのうち風邪ウイルスの一種になるのではないかと、などの楽観論も聞かれる。横浜で春の光に煌めく海を眺めながら、多くの先生方とお話できることを願っている。

(根尾昌志)

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

萬年 徹 高橋 昭 金田清志
小山素麿 小柳知彦 田代邦雄
国分正一 服部孝道

編集委員

山崎正志 (編集委員長)
金 彪 (副編集委員長)
亀山 隆 園生雅弘 高橋敏行
谷 論 筑田博隆 永島英樹
中村雅也 根尾昌志 原 政人
飛驒一利 堀 正明 松山幸弘

Vol. 34 No. 8
(2022年2月21日発行)

毎月1回25日発行

1部定価 (本体2,500円+税)

(配送料別)

年ぎめ予約購読料 33,300円+税

送料弊社負担

発行/株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

(担当: 山岸)

印刷所/三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所/

(株)文栄社

TEL 03-3814-8541

(株)ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.
6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2022,
Printed in Japan

JCOPY (出版者著作権管理機構 委託出版物)

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。